SHOW-HEY シネマルーム

★★★★★

ありふれた教室

2022 年／ドイツ映画
配給：アルバトロス・フィルム／99 分

2024（令和 6）年 6 月 1 日鑑賞	テアトル梅田

Data　２０２４－４２

監督・脚本：イルケル・チャタク
出演：レオニー・ベネシュ／レオナルト・シュテットニッシュ／エーファ・レーバウ／ミヒャエル・クラマー／ラファエル・シュタホヴィアク

みどころ

「学校モノ」の名作は日本にも多い。『若い人』（62 年）が昔の名作なら、「金八先生」は一世を風靡した人気の「学園ドラマ」シリーズだ。それに対して、ドイツ発の「学校モノ」は？

あなたは“シュタイナー教育”を知ってる？これは「知的な学習だけではなく、感情や意志に働きかける総合芸術も重視する教育方法の一種」で、「子どもの個性を尊重しつつ、個人の能力を最大限に引き出すことを目的としている」そうだから、私の中高時代の受験一辺倒の“詰め込み教育”や“成績主義”とはえらい違いだ。そんな学校に赴任してきた仕事熱心な女教師が、ちょっとしたコソ泥を特定するため、ノートパソコンにある細工をしてみると・・・？

犯人が“ゲロ”すればコトは簡単だが、否認すれば、違法収集証拠の証拠能力は如何に？そんな難しいことは言わずとも、「隠し撮り（盗撮）」は人格権の侵害だから、学校を挙げての大騒動に！なるほど、なるほど・・・。

99 分ながらスリルとサスペンスに富んだ展開は、ジェームズ・ボンド映画並みの緊張感がある。政治資金規正法の改正をめぐる国会論議は呆れてモノが言えないほどの体たらくだが、それはこの学校の“迷走ぶり”も同じ。ところが、ラストは意外にも・・・。

この結末を、あなたはどう考える？クソ難しいコラム４本も熟読した上で、それをしっかり考えたい。

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

■□■ドイツ発の「学校モノ」がベルリンで２冠！それはなぜ■□■

日本でも「学校モノ」は多いが、本作も『ありふれた教室』という邦題からわかる通り、とある中学校に赴任してきた女性教師を主人公にした「学校モノ」だ。近時の日本の「学

校モノ」はいじめや殺人を含むスリラーめいたものが多いが、私が中学生の時に見た「学校モノ」の典型は、石坂洋次郎の原作を石原裕次郎、吉永小百合、浅丘ルリ子らの共演で映画化した『若い人』（62 年）だ。そこでは、自由と平等になった戦後の時代を生き抜こうとするエキセントリックな主人公の女子高生と、彼女の若さと奔放さに戸惑いながらも誠実に生徒を教え導いていこうとする教師たちの姿が印象的に描かれていた。

しかし、1945 年の終戦後、アメリカの庇護下で平和と民主主義が保障され、かつ戦前と同じような単一民族で構成された日本と違い、敗戦後東西に分断されたドイツは、1990 年にやっと統一を果たしたとはいえ、苦難の道を歩んできた。さらにフランス、イギリスと同じようにドイツも「移民の国」になったから、その対応に悩み苦しんできた。国の成り立ちにおいて、最も大切なものは教育。それは、明治国家が躍進する中で福沢諭吉が説いた「学問のすゝめ」でも明らかだが、さてドイツにおける教育は？

『若い人』は北海道函館のミッションスクールに赴任してきた背の高い男性教師の登場から始まったが、本作は、とある中学校に赴任してきたポーランド系ドイツ人のカーラ（レオニー・ベネシュ）の授業風景から始まる。団塊世代の私たちの時代は 1 クラス 50 名の詰め込みだったが、本作のクラスは約 40 名。日本と違うのは、人種のルーツが多様であること、そのためかはよくはわからないが、生徒たちの学力には大きな違いがありそうだ。授業冒頭の挨拶（儀式？）は少し子供じみているが、カーラがやっている授業の熱心さと、クラス担当としての生徒 1 人 1 人への接し方を見ていると、彼女の教師としての優秀さがよくわかる。また、彼女の専門は数学のようだが、体育の授業もやっているから、その忙しさは想像を絶するものがある。こりゃ大変だ！

本作導入部の風景を見ているとそんな印象ばかりが残ったが、なぜそんな本作が第 73 回ベルリン国際映画祭パノラマ部門で CICAE（国際アートシネマ連盟）賞とヨーロッパ・シネマ・レーベルの 2 冠をゲットしたの？さらに 2023 年ドイツ映画賞で主要 5 部門をゲットし、2024 年度米アカデミー賞国際長編映画賞にノミネートされたの？

■□■成績がそんなに大事？いやいや！シュタイナー教育とは■□■

1949 年生まれの私は、1 学年違いの兄に続いて、1961 年 4 月に愛光学園という中高一貫 6 年制の男子ばかりの進学校に入学した。同校は「愛と光の使徒たること」を目指すカソリック系の学校だが、灘やラサールと同じように、東大・京大等の一流大学への合格者数を競い合う学校だったから、入学した途端に徹底した「成績主義」の中に放り込まれた。戦前の日本にあった海軍兵学校や陸軍士官学校がそうであったように、我が校でも、常に成績の順位が明示され、自分の立ち位置が明らかにされたわけだ。

それに対して、カーラ役を演じた女優レオニー・ベネシュが通った学校は、すべてシュタイナー教育の学校だったそうだが、カーラが勤務する中学校もそうらしい。パンフレットによると、シュタイナー教育とは「知的な学習だけではなく、感情や意志に働きかける総合芸術も重視する教育方法の一種。オーストリア出身のルドルフ・シュタイナーの思想

に基づき、子どもの個性を尊重しつつ、個人の能力を最大限に引き出すことを目的としている」だが、私はその違いにびっくり。もし愛光学園がシュタイナー教育の学校だったら、私の週末毎の映画館通いや将棋・囲碁へ熱中する姿をどう評価してくれたのだろうか？

他方、私は大学生活に入ってはじめて大きな自由を手に入れるとともに、学生運動の世界に飛び込んでいったが、逆に中高時代は狭い鳥かごの中に閉じ込められてしまっていたから、自分の考えや自分の意見を全く持っていなかったようだ。すると、もし本作のカーラのような先生からいろいろな質問をされたら、きっと戸惑って何も答えられなかっただろう。「学校は現代社会の縮図だ」とよく言われるが、そんな中高時代を松山市で送った私には本作に見る「ありふれた教室」は全然ありふれておらず、極めて新鮮！

■□■金八先生 vs カーラ先生！日本でこんな風景は？■□■

本作のチラシには「正義や真実をのみ込んでいく衝撃的な展開　学校の〈不都合な真実〉を抉り出す脅威の問題作」、「現代社会の縮図〈学校〉に潜む“光”と“闇”―。これは、不寛容な世界で生きる〈わたしたち〉の物語」と書かれている。またパンフレットには、「現代社会の縮図というべき“学校”を舞台に若き女性教師の悪夢のような極限心理をあぶり出し、本年度アカデミー賞国際長編映画賞ノミネートを果たしたサスペンス・スリラー」と書かれている。そんな本作のパンフレットには、①樋口毅宏氏（ハードボイルド育児作家）の「『ありふれた教室』は日本でリメイクできるか？」②高松平藏氏（ドイツ在住ジャーナリスト）の「作品の背景としての『ドイツ』」③河内秀子氏（ドイツ在住ライター）の「学校は社会の縮図。炎上、キャンセルカルチャー、ゼロ寛容。学校というブラックボックスから垣間見える、社会のひずみ」④真金薫子氏（三楽病院 精神神経科部長・東京医科歯科大学臨床教授）の「学校現場の影に光を」という 4 本のコラムが掲載されている。

これらはいずれも力作だが、とりわけ①は興味深い。「『ありふれた教室』は日本でリメイクできるか？」という挑発的なタイトルは「反語」だから、その答えは「できない」ということになる。それはなぜなら、そもそも日本にはシュタイナー教育なるものが存在しない上、樋口氏の解説によれば、「日本は 2020 年代に入ってもテレビで「あなたが選ぶ学園ドラマ」のランキングを作ったら「金八先生」が 1 位になるような国だ。」からだ。さらに、そこには「日本の中学生が先生に対して「おかしい」と糾弾するだろうか。内申書を恐れる生徒たちが自発的に真相を究明するか。活字の力を信じ、学校新聞を使って「文春砲」を炸裂させるだろうか。」と書かれている。したがって、「『ありふれた教室』は日本でリメイクできるか？」と聞かれると、その答えは「いや、できない」となるわけだ。

さらに②のコラムも面白い。同コラムは「ドイツの学校には『職員室』がない」「外国系市民たち」「議論文化とジャーナリズム」「これはドイツの社会を映す鏡としての学校だ」という 4 つの興味深い小見出しに分けて書かれているので、これも必読！

■□■クラスで盗難事件が発生！不寛容方式の是非は？■□■

スマホ全盛時代の現在では、キャッシュレスになっているため、皮肉なことに財布から

現金を盗み取る形での盗難事件は激減しているらしい。そんな状況下では、本作導入部の問題提起は成立しなくなってしまうが、本作導入部では、校内で金品の盗難事件が発生したため、カーラの授業中にいきなり先生方が乗り込んで授業を中断させた上、教え子たちの抜き打ち検査を行う姿が描かれる。これはベーム校長（アンネ・カトリーン・グミッヒ）が、問題があれば徹底的に調査するという“不寛容方式”を採用しているためだが、学校内でこんなやり方がホントに認められるの？現に本職の刑事ではない教師たちによる「にわか捜査」（犯人探し）の結果、一旦は犯人（生徒）が特定されたかに見えたものの、それが完全に誤りであったことがわかると、その波紋は・・・？

他方、ある日カーラは同僚教師のひとりが募金箱の小銭をくすねるのを目撃したからビックリ！そこでカーラは盗難事件の犯人を特定するため、財布を入れたままの上着を職員室の椅子にかけておき、ノートパソコンのカメラで窃盗の決定的瞬間を撮影しようと一計を案じたが、これも、学校内でそんなことが許されるの？そう思いながら私は事態を見守っていたが、一旦席を離れたカーラが戻ってくると、案の定、財布からお金が抜き取られていた上、パソコンに記録された動画には、犯人の顔は映っていなかったものの、特徴的な星の模様をあしらったブラウスが映っていたから、窃盗犯人をベテランの事務員クーン（エーファ・レーバウ）と睨んだカーラは、それを直接クーンに確かめるべく、「クーンさん、私に言うことは？表沙汰にはしませんから」と問うことに。そこで問題になるのは、この確認のやり方と、パソコン上に映った画像の証拠能力だ。カーラは当然クーンが「ごめんなさい」と素直に自己の犯行を認めると予想したのだが、その予想に反してクーンが犯行を全面的に否定した上、自分を犯人扱いにするカーラや校長の態度に激高し、カーラのクラスで最も成績優秀な息子のオスカー（レオナルト・シュテットニッシュ）の手を引いて帰宅してしまったからビックリ！「この動画は人格権の侵害にあたる」というドゥデク先生（ラファエル・シュタホヴィアク）の指摘がカーラを不安にさせるとともに、カーラ自身も対応を誤ったのではないかとの動揺が広がることに。

■□■クーンの反撃は？学校、保護者会、生徒たちの対応は？■□■

カーラが仕掛けた動画にまんまとハマったかと思われた窃盗犯人（？）クーンは、以降一切出勤しなくなった上、オスカーも担任教師であるカーラに対して徹底的に抵抗し、かつ反撃を加えてきたから、アレレ、アレレ・・・。本作は99分とコンパクトだが、中盤以降は大きな緊張感の中でそんな姿が描かれていくから、シャーロック・ホームズ映画やジェームズ・ボンド映画並みのスリルとサスペンスに満ちている。

また、この問題は当初はカーラとクーンと校長だけの問題として処理されていたものの、クーンの長期欠席が続き、教師間、生徒間で「カーラがパソコンで密かに録画していた」等の噂が広まる中で、開かれた保護者会に突如クーンが現れ、「この女はこっそり動画を撮影していたの。ひどいでしょ。恥知らずよ！」と罵声を浴びせながらカーラを糾弾したから、カーラはひどいパニック状態に陥ることに。

そんな状況下でも、生徒思いのカーラはオスカーに寄り添おうとしたが、母親の無実を信じるオスカーはカーラに謝罪を要求し、「断るなら後悔するよ」と脅迫めいた言葉を投げつけてくることに。さらにカーラは職員室では真相究明のためなら強硬手段もいとわないリーベンヴェルダ先生（ミヒャエル・クラマー）らと対立し、教室内では生徒たちに授業をボイコットされたから、このままでは心身ともに疲れ果ててダウン・・・？

■□■迷走に次ぐ迷走！こりゃ解決は困難！結末は如何に?■□■

2024 年 6 月 6 日、「政治とカネ」を巡る、議員立法による政治資金規制法の改正案について、自民党と岸田内閣が、連立与党のパートナーである公明党の修正案はもとより、日本維新の会の修正案も再修正案も受け入れた（丸飲みした）結果、やっと改正法の修正案（再修正案）が衆議院で成立。これによって、6 月 23 日の会期末までに改正法が成立する見込みになった。この改正法の内容はひどいものだし、修正協議のプロセスもひどいものだが、それ以上に際立つのが自民党の迷走ぶりだ。岸田内閣のリーダーシップの無さは今にはじまったことではないが、あの無能ぶりとあの無神経さには呆れる他ない。本作の中盤から後半にかけては、それと同じような、いや、それ以上のカーラとクーンの対立を核とする、学校全体の迷走ぶりが際立ってくるので、その姿をしっかり確認したい。

私が思うに、本作が多くの賞を受賞してきた理由の一つは、その迷走する姿の中に一種のスリルとサスペンス性が加わっている点にある。つまり、カーラが目撃したのは、ある一人の同僚が募金箱の小銭をくすねる事件。また、カーラが犯人を特定するために仕掛けたノートパソコンのカメラに映っていたのは、上着の財布が抜き取られる風景だけだから、事件自体はごく軽微なものだ。他方、いくら「犯人を特定するため」とはいえ、隠しカメラの設置によって得られた証拠はいわゆる“違法収集証拠”だから、刑事訴訟手続上違法だ。また、ドゥデク先生の言う通り、「人格権の侵害」にあたるから、クーンの「任意の自白」があればともかく、それがない以上は、ややこしいことになっていくのは仕方ない。『007』シリーズでは、過去の 20 作すべてがそれぞれ「スリルとサスペンス」いっぱいの内容になっていたが、「学校モノ」たる本作に見る微罪の犯人追及ストーリーも、かなりスリルとサスペンスに富んだ展開になっているので、それに注目！

結局、学校側が下した結論は、オスカーの退学。それ自体は、「ああ、やっぱり！」「それくらいが相場！」と思えるものだが、本作ラストは意外にも、そのオスカーがカーラの教室を一人で訪れてくるという、なんとも意外なストーリーになるので、それに注目！さらに、そこで注目すべき“小道具”は、ルービックキューブだ。私はルービックキューブで遊んだことはないが、あなたは何分間で正解に導くことができる？また、それを正確に導くために必要なさまざまな条件とは一体ナニ？そんな、お見事な本作のラストに拍手！

2024（令和 6）年 6 月 7 日記